
人狼との旅

マーカス・ライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人狼との旅

【Nコード】

N9639V

【作者名】

マークス・ライト

【あらすじ】

ある日少年は友人をいじめから救う見返りとして人狼にされてしまう。

家族や住んでいた村からも追放されてしまい、孤独の旅をはじめると……。

第一話

ここはフェイル村…。小さい村だが人々は元気に働き、今日も畑仕事などのため朝早くから起きて仕事に励んでいた。

そこに住んでいる少年の一人、ライトは自分の仕事を終え、隣町に住んでいる親友のアレンに会いに行こうと荷物の支度をしていた。

「じゃあねお母さん。行つてきまーす。」と元気な声で母に言うライト。

「行つてらっしゃい。アレンと仲良くねー。」

ライトは久しぶりに親友に会えることにウキウキしながら隣町に向かって走りだした。

ライトは15歳の男の子。髪の毛は綺麗な銀髪で少し長め。身長はそんなに高くなく、顔は女の子のようで初めて会った人達にはよく女の子と間違われるが、フェイル村の女の子達にはその顔が可愛いと割と人気がある。

アレンとは幼い時から親交があり時々こうしてお互いの村に遊びに行くことがよくあった。

（アレン元気かな？一ヶ月ぶりに会うから楽しみだな。）とライトは心の中で呟く。

しばらく歩いているうちにライトは隣町、エイリス町に辿りついた。彼はアレンの住んでいる家に向かった。

アレンの家に着くとライトはドアをノックした。

「こんにちは、僕ですライトです！ 遊びに来ました！」と元気な声で挨拶した。

するとドアが開きアレンの母が出てきた。

「あら、ライト君久しぶりねえ。いらっしやい。良く来たわね。」と微笑むアレンの母。

「はい、お久しぶりです。 アレンは居ますか？」

するとアレンの母は眉間にしわを寄せ、

「実はあの子なんだか2週間前から元気がないの。膝とかには時々かすり傷作ってくるし…。そういたのか聞いても教えてくれないのよ。」

「アレンが？」

「うん。そこでライト君にお願いがあるんだけどね、どうしたのか聞いてくれないかな？あの子、ライト君にだったら話してみたいなこと言ってたから。」

そう頼まれたライトはアレンのいる部屋に行った。

「アレン、入るよ。」

ライトはアレンの部屋のドアを開いた。

「ライト……。」

「どうしたのアレン？お母さん心配してたじゃない。」

アレンは俯いたまま、

「ねえライト……、これ見てよ。」

と言って服の袖をめくり腕を見せた。

「これは……！」

アレンの腕は数え切れない程の痣やかすり傷ができていた。

「どうしたんだよこれ！？ 何でもつと早く言わなかったの！？」

ライトはアレンの肩の手を置く。

アレンの話によるとアレンは2週間前にハリスと呼ばれるこの町の不良とその仲間にいじめに合っているのだという。原因はただ単にぶつかってしまっただけなのだが、そのぶつかったことにアレンは気づかずに謝らなかったそうだった。

その日からアレンは毎日殴る蹴るの暴行を受けているのだというのだ。

誰にも言えなかったのは、チクるといつもの倍以上の暴行を加えると口止めされていたからだだった。

「ひどいじゃないかそんなこと……！」

「でももう俺耐えられないよ……。もう毎日毎日いじめれるなんて……。」

そう言いながらアレンは目に涙を浮かべる。

「安心してアレン。僕が何とかするよ。」

ライトはアレンに微笑みかけた。

「えっ？どうするんだよ？ あいつらマジでヤバイんだぜ、大人も皆怖がっているくらいなんだから。」

アレンは心配するが……、

「いいから、いいから。僕に任せてっ！」

ライトはアレンにハリス達の居場所を聞くとそこに向かって走り出した。

正直言つて彼には何の案もなかった。ただ大事な親友が傷つくことを何としても止めたかったのだ。

ハリス達のたまり場はエイリス町の端の廃屋と化したスナックに有った。

ライトはそこに着くと、大きく息を吸い込んで中に入った……。

第二話

中に入るとそこにはハリスとその仲間達が居た。
ハリスの身長は高く体格も良く、自分より一つ上の歳には見えなかった。

「何だお前？何しに来たんだ？」

ライトが来たことの気づいたハリスに尋ねた。

ライトは震えながら、

「お、お前がいつもいじめているアレンの事で来たんだ…。もうやめてくれないか？」

それを聞いた仲間達は笑い出した。

「ははぁん。お前アレンのダチか。あのゴミ、チクリやがったのかっ。」

ハリスは舌打ちした。

「違うっ！！ 僕が自分でアレンがいじめられている事に気づいて来たんだ！」

ハリスは不気味な笑みを浮かべて、

「ふうん、いい度胸じゃねえか。でも帰るなら今のうちだぜ？」

「嫌だっ！もうアレんに酷いことをしないって約束するまで帰らないぞ！」

ライトはハリスを睨む。

するとハリスの仲間達がライトに襲い掛かった。
「生意気なこと言ってるじゃねえぞコラッ!!」

「待てよお前らっ。」

ハリスは彼らを制した・

「別にいいぜ、アレンをいじめるのを止めたって。」

それを聞いた仲間達は、

「はあっ? 何言ってるんだよハリス!？」

「そうよ、こんな馬鹿の言ってることを真に受けるの?」
などと言った野次が飛ぶ。

ハリスは、

「だからよ、お前が俺とタイマンして勝てたら止めてやるよ。正直最近アイツをいじめるの飽きてきたんだよ。さあどうする? 俺とやり合うか?」

ライトはしばらく黙って、

「分かった……。」と言った。

こうしてライトとハリスの対決が始まることになった。

周りの椅子や机をどけて、ちょうど殴り合いが出来るようなスペースができた。

そこにライトとハリスは入った。

「それじゃあ、よーい始めっ。」

とハリスの仲間が試合の始まりを告げた。

その瞬間ハリスの拳がライトの顔面にストレートで叩き込まれた。

「グウツ!!」

間をおかずハリスはライトの髪をつかみ、思いっきり腹を蹴り上げた。

「ガハア……!!」

「ホラホラどうした!? もっと楽しませてくれよ。ホラホラホラアツ!!」

ハリスはライトの鳩尾を連続で殴り続けた。

ライトが血反吐を吐いて倒れ込んだところで殴るのをやめた。

「ハアハアハア。 あうううつ……。」

ライトは苦しそうに腹を押さえている。

「あああつ、面白くねえな。簡単にくたばりやがって。」
と仲間達は笑う。

ハリスはライトに近づき、

「約束どおり、俺らはアレンをいじめるのをやめねえぞ。しかもいつもの倍以上の苦しみを与えてやる。」

それを聞いたライトは

「お願いだ!それだけはやめてくれ!何でも言う事を聞くからつ。」
ライトは殴られた痛みとアレンが傷つくこと想像して泣きながら懇願する。

「へえ、何でも言う事を聞くのか。」

「……うん。だからお願いします。」

それを聞いた仲間達は

「それじゃあコイツを金持ちのホモ達に売っちゃまおうぜ！こいつの顔女みたいだからゲイは喜んで高い金払ってくれるぜ！！」

「おおつ、それいいねえ。」

といったライトを同性愛者に売る話をしている。

だがハリスは、

「いや、それよりコイツには禁断の呪いの魔法をかける。どんなことをしても一生治らない呪いをな……。」

「えっ？どんな呪いだよ？」

ハリスはそれを聞いて懷から何かの本を取り出した。

「コイツの姿を畜生の類にしてやることだ。この本にはその呪文が書いてる。」

ハリスの持っていた本は彼が魔法の図書館から盗みだした禁断の本でそれに書かれている呪文は決して解くことができない呪術ばかりだった。

ハリスはライトの髪を掴み机に叩きつけるようにして乗せると、呪文を読み出した。

数分読み続けるとライトの体に異変が表れだした。

歯と爪が全て抜け新しく生えてきたり、腰が曲がり始めたのだった。

「うわあああつ！！！！」

ライトは突然体に襲ってきた急激な痛みにも気絶した。

何時間か経った頃、ライトは目を覚ました。

「おいハリス。犬っころが起きたぜ。」

ライトは（犬っころ？）と思った。

ハリスはライトのところに近づき、

「ほら見るよ、これが今のお前の姿だ。」

と言つて大きな鏡をライトに見せた。

「つつつ！」

ライトは自分の姿を見て言葉を失った。

それは今までの自分の人間の姿ではなく、二足歩行で立っている狼の姿だった。

体毛の色は人間だった頃の髪の毛と同じ綺麗な銀色で毛並みも美しい。腰の辺りには先が少し白いフワフワの尻尾があった。

顔も狼として整った顔立ちをしていた。

「こ、これは……。」

「凄い呪いだろ？ 今のお前の姿は俗に云われる人狼ってやつだ。」

ハリスは楽しげに説明する。

「そ、そんな……。」

ライトは今だ信じられないようだ。

「それじゃあ約束だ、ワンコロ。アレンはこれから絶対いじめたり

しねえよ。わかつたらとつと帰りな。」

ハリス達は笑いながら、ライトを追い返した。

ライトはハリス達のたまり場から出て行き、近くに落ちていた布切れで自分の姿が見えないように、アレンの家へ行った。

周りの人間に今の姿が気づかれぬように人混みを避け、アレンの家に着き、玄関にアレン宛の手紙を置いた。

それからライトは自分が人狼になったショックで下を俯きながら、町を出て行き自分の故郷へと帰りだした。

しかしライトは村に帰る途中で足が止まった。

（今の僕がこの姿で村に帰ったらどうなるんだろう？きっと追い出されるよね、こんな姿だもん……。）

という悩みが彼を襲い、彼は泣き出した。

そしてしばらく悩んだ挙句、

（きっと大丈夫だね。お母さんも村の人達も僕がどんな姿になったっていつもと同じように接してくれるよね！）

とライトは思い村に向かって歩み始めた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9639v/>

人狼との旅

2011年10月9日11時48分発行